

埋文センターニュース

第18号

2003.10.31

津市埋蔵文化財センター



四ツ野B遺跡第1次発掘調査(写真は上が南)

第14号から連載してきたシリーズ「安濃津をゆく」もいよいよ最終回、今回は伊勢湾沿岸部の遺跡を紹介します。

旧石器時代～縄文時代

この地域の旧石器時代については、高茶屋台地南端部に位置する四ツ野B遺跡（高茶屋小森町）で後期旧石器時代（約30,000～12,000年前）のナイフ形石器が採集されているものの、詳しいことはまだよくわかっていません。

また、縄文時代については、垂水A遺跡（大字垂水）で早期～後期、向山遺跡（高茶屋小森町）で早期と晩期の土器片が採集されているほか、四ツ野B遺跡と雲出川左岸の自然堤防上に位置する雲出島貫遺跡では晩期の土器棺墓が確認されています。

弥生時代～古墳時代

四ツ野B遺跡の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての竪穴住居が88棟検出されました。この遺跡では、住宅団地造成工事の際に複数の突線鈕式銅鐸が出土しており、集落と銅鐸との関係が注目されています。

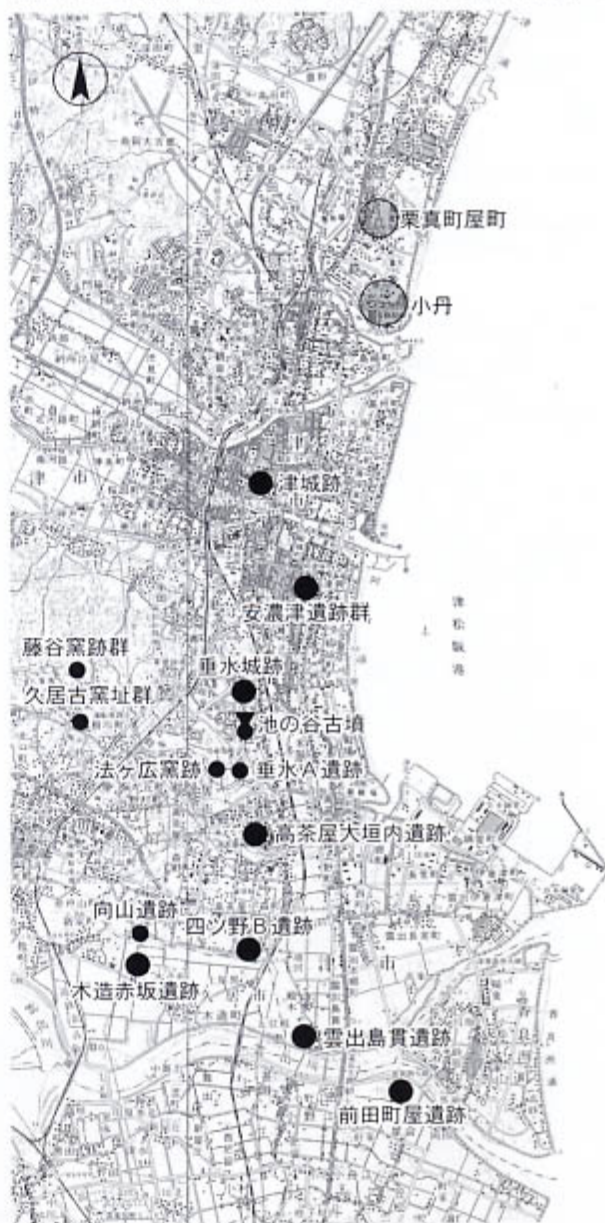
また、四ツ野B遺跡などの台地上の遺跡のほかに、低地部には木造赤坂遺跡（久居市）や雲出島貫遺跡などが展開しており、雲出島貫遺跡や前田町屋遺跡（三雲町）では、古墳時代前期の墳墓群や古墳群が確認されています。

このような低地部の小規模な墳墓群や古墳群とは対照的に、伊勢湾を一望する標高約50mの垂水丘陵突端部には、墳長が約90m、市内最大の前方後円墳である池の谷古墳が築造されています。築造時期は採集された埴輪から4世紀末～5世紀初頭と考えられており、この地域の盟主墳に位置づけられています。

さて、『日本書紀』雄略天皇17年3月条には、伊勢国藤形村などから天皇の朝夕の食器を作る贅土師部が献上されたとの記事があり、

早くからこの地域の土師器工人の存在が注目されてきました。

近年、藤方を見下ろす高茶屋台地縁辺に位置する高茶屋大垣内遺跡（城山一丁目）でこの記事にかかわる貴重な発見がありました。藤方は古くは「藤湯」と記されたことから、この辺りは潟湖を利用した港が存在する水陸交通の要衝であったと考えられています。調査では古墳時代後期に遡る土器焼成坑や、30数個体の土器がまとまって出土した竪穴住居の



遺跡位置図 1:100,000(国土院「津東部」「津西部」「松阪」「二本木」1:50,000)

ほか、製作途中の台付甕や焼け歪みがある須恵器が出土するなど、まさに「土器づくりのさと」であったことが明らかになりました。

また、この遺跡の北側を流れる相川を少し遡ると埴輪を生産していた法ヶ広窯跡、さらにその上流には前号で紹介した久居古窯址群や藤谷窯跡群など、相川流域には須恵器や埴輪を生産した遺跡が数多く分布しています。

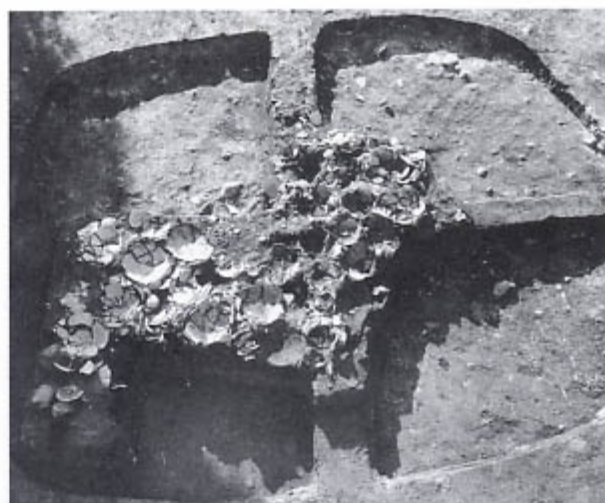
古代～中世

律令制下、津市は北部が奄芸郡、中部が安濃郡、南部が一志郡に属していました。一志郡嶋抜郷に属する雲出島貫遺跡では、7～8世紀の大型掘立柱建物、11～12世紀代を中心とした大規模な堀を巡らせた居館跡とそれを囲う三重の大溝や人工的な水路が発見されました。このような中世前期にまで遡る居館は全国的にも少なく、水陸交通の拠点としてだけでなく、遺跡と隣接する木造荘(久居市)との関連の可能性なども指摘されています。

ところで、津市の地名は、博多津(福岡県)や坊津(鹿児島県)と並んで日本三津と称された港湾都市「安濃津」に由来することは広く知られるところです。しかし、安濃津は明応7年(1498)の大地震で壊滅的な打撃を受け衰退したと言われています。長く港や港町の実



池の谷古墳(南東から 前方部は宅地化される)



高茶屋大垣内遺跡竪穴住居※



高茶屋銅鐸 1号鐸 [残存高66.3cm]



2号鐸[86.3cm](東京国立博物館蔵)



銅鐸破片

像が見えてこなかった安濃津ですが、安濃津遺跡群(柳山津興)^{やなぎやま つ おき}の発掘調査では、標高1.4～1.6m前後の砂堆上に、港町の一部と目される13・15世紀代の集落と、18世紀代の集落が確認されました。

また、中世後期、津市とその周辺には多くの城館が築かれています。これは北長野(美里村)に拠点を持ち、安濃郡と奄芸郡を領有する国人領主長野氏と、南伊勢を領有する伊勢国司北畠氏の対立の構図を反映したものと考えられています。領域を接する両者は再三にわたり対峙し、天文18年(1549)には垂水で合戦に及んでいます。この合戦の際に北畠氏側の最前線基地であったと考えられている垂水城跡は、眺望のきく丘陵尾根上に連続して郭が築かれ、北側は堀や土塁で固められていたことが判明しました。

近世

津城は、長野氏の養嗣子となった織田信長の弟信良(のちに織田信包)^{のぶよし のぶかね}によって、天正8

年(1580)頃に築城されたとされています。その後、富田氏を経て、慶長13年(1608)に藤堂高虎が津城主となり、城を中心とした城下町が形成されました。江戸期のまちの面影は明治以降の近代化、戦災とその復興によって失われてしまいましたが、現在の市街地は津藩32万石の城下町の上に成り立っています。

沿岸北部の遺跡

今回は市中南部の遺跡を中心に紹介してきましたが、北部には遺跡が全く無かったわけでは決してありません。例えば、第8号で紹介した第11代津市長酒井萬馬氏所蔵の考古資料の中には、志登茂川の河口部にあたる小丹(現在の江戸橋三丁目付近)^{おに}や栗真町屋町^{くりま まちや}で採集された土器があります。また、津市の海浜部では、中世から塩づくりが盛んに行われていたこともわかっています。遺跡は人間の活動の痕跡ですから、新たな遺跡の発見によって、これらにかかる歴史も徐々に明らかになっていくことでしょう。(藤田充子)



雲出島貫遺跡※



垂水城跡



津御城下分間絵図(部分)[享保4年(1719)](個人蔵)

※写真提供：三重県埋蔵文化財センター

遺物紹介⑬ 雲出島貫遺跡 木棺墓出土遺物

くもつしまぬき
雲出島貫遺跡は、津市南部の雲出島貫町にあり、津市の南を限る伊勢平野の主要河川、雲出川の下流部左岸にあたります。今回紹介する木棺墓出土遺物は、平成10年度に三重県埋蔵文化財センターが行った発掘調査で見つかったものです。

この遺跡は11世紀の終わりから13世紀中頃（平安時代末～鎌倉時代前半）を中心とする遺跡で、建物群や墓が12世紀中頃の溝に囲まれていることがわかりました。

墓は土葬で、釘の出土状況から木製の棺が納められていたと考えられています。その中に、青磁碗2個、白磁碗1個、白磁皿4個、漆塗りの小箱（中には鏡）、腰刀（刀身の全長35.8cm）などが納められていたようです。

墓の時期は、青磁碗の特徴から12世紀末～13世紀初め頃と考えられています。いっぽう白磁はそれよりも古いものです。おそらく家宝のように大切に保管されたあと、青磁と

一緒に納められたのでしょう。当時の日本には、まだ磁器を作る技術がありませんでしたから、この様な青磁や白磁は、いわば外国から輸入された高級ブランド品なのです。青磁は中国の南宋時代のもので、龍泉窯という有名産地の系統です。2点とも内面に飛雲文状の模様を片切彫りで3単位描いています。

漆塗りの箱には、正方形の鏡が入っていました。宋（湖州）鏡式という種類で、背面に菊花と2羽の雀（雄と雌）が描かれています。腰刀は、柄にも鞘にも鮫皮を巻き、さらに漆を塗り重ねています。このほか、漆器の小皿もあったようです。

この様な副葬品は、当時の墓としてはたいへん豪華なもので、全国的にも珍しいものです。この墓に葬られた人が、当時の有力者であったことをうかがわせます。（山口 格）
〈参考文献〉

『嶋抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター2000年



遺跡位置図（1:50,000）〔国土地理院『松阪港』1:25,000より〕



出土した青磁（後列右2点）と白磁



副葬品の出土状況※

※写真提供：三重県埋蔵文化財センター

遺跡紹介⑮ 安濃津遺跡群

津市の中央部は、古くは安濃津と呼ばれ、港町として繁栄してきたといわれています。しかし、今から約500年前の明応^{めいおう}7年(1498)に起きた大地震で壊滅的な被害を受け、港町としての機能を失ってしまったといわれてきました。具体的な姿がまったく知られないまま、いわば「幻の港」と考えられてきたのです。

ところが、平成8年に柳山津興^{やなぎやま つおき}に所在する津実業高校（現在の「みえ夢学園高校」）で行われた発掘調査では、中世の遺構や遺物が多数検出され、中世の港町に関する遺跡ではないかと注目されるようになりました。

発掘調査で検出された遺構については、掘立柱建物は明確にできたものが少ないものの、溝、土坑、井戸などが多数あり、13世紀、15世紀、18世紀の3時期に大きく区分できま

す。溝の方向などから土地の区画に注目すれば、13世紀の区画と15世紀の区画では大きく方向が異なっており、この間に大きな画期があったと考えることができます。一方、18世紀の区画については15世紀の区画とあまり大きな隔たりはなく、集落の景観そのものに限って見た場合、中世と近世との違い以上に、中世前期と中世後期の違いの方が大きいといえることができます。また、この調査では16～17世紀の遺構や遺物はほとんど検出されていませんが、これは明応の大地震による海岸部の壊滅的な被害とあたかも呼応するような状況であるといえます。

13世紀の溝からは山茶碗が大量に出土していますが、これらについては未使用のものが圧倒的多数を占めます。このことは、山茶碗が生産地で選別され、完成品として出荷され



遺跡位置図（国土地理院「津東部」1:25,000）



13世紀の溝※

たのではなく、生産地では何の調整もされず、重ね焼きをした窯詰め状態のまま、ここへ運ばれてきたことを示しています。つまり、商品としての碗の選別や調整がなされていたと考えることが可能であり、安濃津には陶器の二次集積者、つまり卸問屋的な集団が存在していたと考えることができます。山茶碗のなかには墨書をもつものもあり、このうちの1点は「丁綱」と読める可能性があります。もしそうであれば、福岡県博多遺跡群の墨書土器に類例があり、海運に関連するものと考えることができます。

このように「みえ夢学園高校」での発掘調査の成果は、これまでの文献資料のみでは知ることのできなかった安濃津を、より具体的に考えるうえで大きなヒントとなりました。高校の周辺は既に市街地化されていますが、調査の結果から、今なお遺構・遺物が良好な状態で残っているものと考えられます。今後の調査が期待されます。（村木一弥）



土師器 鍋



山茶碗



調査区全景（左後方の校舎は育生小学校）※

※写真提供：三重県埋蔵文化財センター

考古学ゼミナールを開催

平成15年2月22日（土）から4週連続で、「考古学ゼミナール」を開催しました。これは、平成13年度から行ってきた「埋蔵文化財体験講座」を、拡大・充実したものです。これまでの講座では、埋蔵文化財保護に対する理解を深めていただくことを主としていましたが、今回は、埋蔵文化財保護に基づいて行われる、考古学という学問の魅力を知っていただくことに力を入れました。

1日目は、制度の説明、施設の見学、発掘調査の説明を行ったあと、津市の遺跡を紹介しました。本物の出土遺物を手にとって観察する「実物体験」には新鮮な驚きがあったようです。

2日目は、現地見学を行いました。城跡の見学は雨天中止となりましたが、三重県立博物館では鳥居古墳の石棺と出土遺物を見学したほか、近年話題になった富本銭と津市出土の和同開珎についての講義を行いました。

3日目は、いよいよ考古学体験の始まりです。まず、考古学とはどんな学問か、どのようにして研究するのかを学んだ後、実際の作業手順に従って、注記と接合を体験しました。

4日目は、研究の基礎作業と研究成果の講義です。土器の実測体験では「難しいなあ」と言いつつも、表情は真剣そのもの。気分はすっかり考古学者だったようです。最後は、発掘調査に基づく研究成果の講義です。古代から中世にかけて津の風景が大きく変わり、私たちが知る「ふるさとの風景」ができあがる過程を解説しました。また「発掘が語る災害情報」と題して発掘でわかる地震情報を紹介し、埋蔵文化財調査が災害予防にも貢献できることを紹介しました。講義終了後、全日程参加者には教育長から修了証が授与され、アンケート調査の感想文には「歴史を知る楽しさがわかった」「もっと深く知りたい」といった声が寄せられました。（山口 格）



本物をじっくり観察



土器実測に挑戦

《編集後記》

本号を編集集中、国立三重大学構内で遺跡新発見の一報が入りました。大学は市北部を流れる志登茂川の河口部砂堆上に位置します。今後、市北部の海岸部を中心に、改めて遺跡分布状況の把握に努める必要があると痛感した次第です。（編集部）

発行日：平成15年10月31日
編集・発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058
三重県津市安東町1225
TEL 059-229-0210
FAX 059-229-4601
印刷：森田印刷株式会社